

〈実践報告〉

和太鼓を材とした総合的な学習における生徒の探究のプロセス

松本 隆 信州大学教育学部附属松本中学校
 伏木久始 信州大学教育学部教育科学講座

A Learning Process by Doing the Japanese Drum in the Lessons of Interdisciplinary Learning.

MATSUMOTO Takashi: Matsumoto Junior High School

FUSEGI Hisashi: Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	学級経営の中核的な活動に位置づけて実践している総合的な学習において、生徒たちが「和太鼓」の演奏を通してつながり合い、響きを重ね合う活動のなかで、生徒一人ひとりの探究がどのような過程を経て深まっていくのかを明らかにする。
キーワード	総合的な学習 和太鼓 学び合い もの・ひと・こと
実践の目的	「和太鼓」をテーマとした総合的な学習の指導
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部附属松本中学校2年D組38名(現3年D組)
実践期間	2009年4月～6月
実践研究の方法と経過	教師は、生徒が「もの・ひと・こと」と向き合い、頭や、体、心を使って全身でかかわっていける総合的な学習のテーマを学級の中核に据えたいと考えていた。生徒たちが決めた「和太鼓」の活動に学習材としての価値を見だし、その中で個の課題を設定しながら探究を深めていけるような支援を行った。その過程で一人ひとりの探究がどのような姿として表出されているのかを生徒の言動から具体的に抽出した。
実践から得られた知見・提言	生徒たちは、自ら課題をもって和太鼓と向き合い、仲間の真剣な取り組みを自分の追究と重ね合わせながら受け止め、和太鼓から生み出される音と体に伝わる響きを仲間との一体感と共に感じていった。活動そのものが探究のプロセスになる和太鼓の活動において、生徒一人ひとりが自分の課題を明確にしつつ、仲間と共に活動を振り返って自分の課題を適切に更新していけるような場を保障することで、仲間と探究し合うことの意義を実感できるようになる。そうした事実を個の学びに沿って明らかにしていくことが重要であることを事例を通して明らかにした。

1. 総合的な学習のテーマ「体で感じる和太鼓の響き」の成立

本稿において「総合的な学習」と表記する場合、教育課程上の領域名である「総合的な学習の時間」とは敢えて区別し、教科・道徳・特別活動との関連指導のみならず、その他学校生活全般にわたって教師が行う関連指導を前提とした中核活動であることを意味する。

(1) 学級総合テーマの決定

学級で取り組んでいく材として、「和太鼓」・「手まり」・「ラーメン」・「石」の4つの候補にしぼられた際、2年D組独自の学級総合において大切にしたい「3つのカギ」を最終的な選択の基準とした。それは、校内研究テーマとの関連から「もの」・「ひと」・「自分」という3つの視点をふまえて、①「DREND」=もの、②「D×D」=ひと、③「MAJIDE」=自分、と命名された。①は「夢(DREAM)」と「やりがい(ENDLESS)」を合成した意味を表し、②は「D組」と「団結」を合成したもので、学級の友と味わう一体感を体験を通して感じることを意味し、③は「本気(MAJI)」と「誇り(PRIDE)」の合成語というように、生徒たちは自分たちの学級総合の材を1つに決めるあたり、全員が納得できる基準としての「カギ」をオリジナルな造語で意味づけていた。その後、それぞれの材を活かした活動の可能性について発表し合い、考え合った末、最後は投票で「和太鼓」に決定した。

(2) 学習材に対する教師の願い

授業者は、学級で和太鼓の活動に取り組んでいくことで、生徒が次のような姿になっていくことを願った。①単に叩いて満足するのではなく、聴く者も巻き込んだ一体感を味わいながら、よりよい響きを生み出す叩き方を追究する。②それとともに、限られた音階の中で表現される響きに、「和」のもつ静と動の両面を感じ、今生活している日本に思いを寄せる。③和太鼓という伝統文化を保存継承する活動に取り組む人々や学級の友との交流を通して、自他共に互いのエネルギーを感じ合い、自己有用感を高めていく。以上の3点を本単元に期待しつつ、和太鼓そのものの魅力である「余韻」や「残響」に迫るために、地元の松本市に拠点を置く和太鼓グループ「鳴桜」のメンバーに会いに行く機会を設定した。それに参加した有志生徒は、目の前で展開される「鳴桜」の太鼓の演奏に魅せられ、その姿に憧れを抱き、その衝撃的な感動を学級の仲間に伝え合う中で、和太鼓の響きを学級全体で追究していく活動への推進役となった。一方、「他の材を追究したかったが投票の結果だからしかたがない」という思いにとどまっている生徒も存在していた。そこで、授業者は、和太鼓を学習材とする際の教育的価値を考察し、生徒と共に「和太鼓」という素材の価値を考え合う学習を位置づけた。

(3) 素材の価値

生徒たちは、総合的な学習のテーマ選択時に設けた3つの「カギ」に即して、和太鼓という素材に見いだせる価値を次のように意味づけた。これらが活動に込められた生徒たちの目標であり、目標に近づくための探究プロセスにおいて、一人ひとりの学びが確認されることになる。

①「DREND」…校内・校外に出て、和太鼓の響きを通して様々な人と交流していくこと

ができる。演奏に思いを込めることで、聴く人の心をとらえていくことができる。互いにアドバイスし合いながら、数多く叩き、また和太鼓に精通した方との出会いと技能面での上達により、表現の可能性を広げていくことができる。

- ②「D × D」… 大勢で叩いた時の一体感や迫力、一音に込められた響きを感じることができる。
- ③「MAJIDE」… 複数で音を出し合ったり、複数の和太鼓の音を重ねたりしていくことができる。全身を使って演奏し、本気になればなるほど、体全体でその音の響きを感じることができる。

2. 単元の構想

(1) 単元名 「体で感じる 和太鼓の響き！」(2年)

(2) 単元の目標

①課題を設定し、解決していく力

●和太鼓にのめり込んでいくための課題を決め出すことができる。

●個の課題だけでなく、友の課題を考えながらよりよく解決しようとし、和太鼓や友への見方を広げることができる。

②他とかかわり、表現していく力

●友の思いを汲み取り、尊重し合いながら練習を進め、自分も友も思いきり和太鼓を叩くことができる。

③自己の生き方を考えていく力

●鳴桜の方の生き方に触れたり、真剣に和太鼓に向き合う友の姿や思いを感じたりすることで、和太鼓の魅力を考え、和太鼓に向き合う自分に出会うことができる。

(3) 単元の展開…全 22 時間扱い(資料 1 参照)

3. 授業の実際 (※以下、人名は仮名で表記する)

(1) 和太鼓にみんなで向き合いたいと考えた久保さん(第 1～6 時)

授業者は、総合的な学習のテーマを全員で決めた「和太鼓」を受け容れ切れないでいる生徒の気持ちにも配慮するなかで、やがては学級の仲間全員が同じ思いで和太鼓の活動に向き合う姿を期待していた。そのためにも、「和太鼓」の活動に主体的に参加できないでいる生徒が、素直に自分の思いを語り出せる場をつくるのが大切だと考えた。

「和太鼓にはあまり興味はないけれど、このままの気持ちで総合的な学習の時間を過ごしたくない」という井手さんの気持ちを学級のみんなの前で語らせることで、和太鼓にまだのめり込めないでいる他の友の発言を引き出すことにした。井手さんの発言を聞き終えた大島さんは、授業を振り返る場面で「実は、私も和太鼓には興味がない」と自らの思いを語り、その後も、数名の女子が続いて同様の発言をした。久保さんは、それまで別の題

材（手まり）を選択していた大島さんも、和太鼓の魅力に気づけば受け容れてくれるだろうと考え、鳴桜体験ツアーに参加した自分が惹かれた和太鼓の魅力を、何とかして伝えていきたいと考えていた。そこで、授業者は、鳴桜体験ツアーに出かけた生徒の感想を学級全員で聞き合う場を設けるとともに、春休みに「和太鼓」について調べてきた生徒の調査発表の場を設けた。久保さんは力強く、気持ちを込めて「鳴桜」の太鼓との出会いから味わった感動を言葉にしてくれた。

「今日をスタートに頑張りたい」と語る大島さんの発言や、「和太鼓に興味がなく、まだ自分の本能が目覚めていない」（表 1 参照）という振り返りの記述から、“総合”の題材を 1 つにしぼったとはいえ、学級の生徒の意識はバラバラであったことは否めなかった。それでも、久保さんが記述した「そんな大島さんの和太鼓への思いにさらに火をつけたい」（表 1 参照）という言葉からは、和太鼓を受け容れ切れずにいる友の思いを受け止めつつ、つながり合うことで活動への思いを共有したいという前向きな気持ちが読み取れる。大島さんの姿をきっかけに、久保さんは自分だけでなくみんなと和太鼓に向き合いたいと考え始めた。

表 1 友とのつながりー 1

大島さんの授業後の振り返り	久保さんの授業後の振り返り
私は、和太鼓に興味がなく、まだ自分の本能が目覚めていないように感じる。でもこれからその本能が目覚めていくのではないかと、私は今、スタート地点を走り始めたばかり。今日をスタートとして、これから活動を頑張りたい。	発表を聞いて、体験で分かったことや感じたこととは少し違った視点から見た和太鼓のことをたくさん知ることができた。自分でできることをやり、クラスで共有していこうとしている姿がすごいと思ったし、これからの総合がますます楽しみになってきた。大島さんも、今日をきっかけとしたいと言っていたので、そんな大島さんの和太鼓への思いにさらに火をつけられるといいです。

(2) 友の姿から、さらに和太鼓にのめり込み始めた久保さん（第 7～12 時）

和太鼓と向き合いたいと考え始めた生徒の「叩きたい」という動機には、それぞれの理由がある。お互いの思いを理解し合うところからスタートし、思いを共有する場づくりが授業者に求められる。生徒たちの間で共有された 3 つの「カギ」の 1 つ、「MAJIDE」がここで具体的に生徒の姿の中に抽出されることが必要となる。

授業者は、一人ひとりの生徒が太鼓を叩く行為に込めている願いを明確にできるよう、自分の気持ちを文字化してノートに綴らせ、互いの願いを伝え合うよう指示した。その学習活動を通して、生徒たちは「リズムよく叩きたい」、「そろえたい」の 2 つの願いが全員に共通の願いでもあることを確認し合った。久保さんは、自分で太鼓を叩きながらも、同時に周りの様子を客観的に観察し、学級の生徒全体の意識が和太鼓に集中していることを確認していた。また、ペアで同じ太鼓を叩くパートナーである三田さんと目を合わせつつ、リズムをゆっくり刻んだり、強く叩くために肘の位置を徐々に上げたりしていた。大島さんは太鼓を強く叩くことを意識していたが、バチの先が削れてしまっても、バチを握る自分の手のひらには何ら変化がないことを、自分の努力不足ととらえていた。大島さんは

「手にマメができるほど夢中で叩いてみたい」と願い、和太鼓を叩くたびに、何度も何度も自分の手のひらの様子を確かめていた。

大島さんの「マメができないと和太鼓を精一杯していると私には感じられない」（表 2 参照）という記述から、大島さんが和太鼓という題材にのめり込み、本気になって追究していることが伺える。「手にマメをつくる」という活動の副産物にも着目して、大島さんが和太鼓にのめり込んでいくプロセスを、授業後の振り返りなどを通して追跡していくことが大切である。また授業者は、久保さんの「友だちの姿を見て、2D の総合が 1 つのところに向かってきた」（表 2 参照）という記述に着目し、和太鼓に一人ひとりが切実な思いで向き合えるようになってきたことを感じ取っていた。久保さんは和太鼓に真剣に向き合っていた。

表 2 友とのつながり-2

大島さんの授業後の振り返り	久保さんの授業後の振り返り
私は今までで一番、力を振り絞って和太鼓を叩けたと思う。でも、どうしてもマメができなかった。マメができたら痛いけど、できないと和太鼓を精一杯していると私には感じられないので、今日は「マメをつくる」ということを目標にして頑張った。すこしできたくらいで、私の本気はまだ出し切れていないみたい。恥ずかしさを振り切り、思いっきりバチを振れるようになりたい。	今日は、自分自身が鳴桜さんの赤羽さんに真剣に教わったことを思い出しながら友だちに教えたら、友だちも真剣にやってくれて、すごくうれしかったです。分からないところは分からないといって、真剣に「叩けるようになりたい」という思いでやってくれる友だちの姿を見て、2D の総合が 1 つの方向に向かってきたなと思いました。

(3) 友と共に和太鼓に浸り込んでいった久保さん（第 13～18 時）

和太鼓に真剣に向き合い始めた生徒が、友とかかわりながら自分の思いを伝え合うという場を大事にしていたが、学級全体を束ねて指導することの限界も感じられたため、3 グループに分けて、練習曲を題材として和太鼓を叩く練習をさせた。リズムよく叩けるようになってきた生徒は、「みんなでそろえたい」と考えるようになったものの、その中で自分の思いを十分に語れていない生徒の姿もあった。

そこで授業者は、グループ全員が互いの課題を理解しながら進められるよう、グループ内の人数を減らし、6 グループにユニットを増やして、次の活動に入らせた。その 1 つ、久保さんが所属した 7 人グループでは、久保さんと高橋さんがペアになって 1 台の太鼓を交互に叩いていた。久保さんは、高橋さんが叩いている時にはじっとその手元を見つめ、連打の時の手首の使い方を研究していた。

大島さんは「私にとってとても大きなもの」（表 3 参照）と記述し、和太鼓を通して人とつながり、「みんなでそろえる」という活動に浸り込んでいく姿が活動の展開に沿って明確になっていた。

一方、久保さんは自身の課題として設定していた「リズムをとらえること」に真剣に取り組んでいたにもかかわらず、「自分も、もっと一生懸命にやりたい」（表 3 参照）と記述した。それは、和太鼓という材に浸り込む過程において、友とつながり、友と共に追究す

る中で、友のよさを発見し、自分を客観視した結果、さらに自分を高めようとする意欲が生まれてきたと読み取ることができる。友とのかかわりにより、さらに和太鼓に浸り込む久保さんの姿がそこにあった。

表3 友とのつながり-3

大島さんの授業後の振り返り	久保さんの授業後の振り返り
今日は、「姿勢」「リズム」「アクセント」を課題として活動した。「そろえる」にも、姿勢やリズムやテンポ、いろいろなことがつながっていて、「姿勢」が大切だと、今日改めて思った。上から下へ思いきり振り下げるバチの力の入り方。調節の仕方。私はドンドン和太鼓の世界に夢中になっていく。一人でやるとつまらないけれど、皆で合わせた時の楽しさは、私にとってとても大きなものだった。	みんなの課題はほとんど同じでリズムをそろえて打つことでした。そこでゆっくり打ってみたらグループ内でそろえることができました。でも速くなると締太鼓と合わなくなっていました。全体で移動打ちをやった時には、だんだんテンポが崩れていったので、テンポを変えずに叩けるようになりたいです。高橋さんは、16回連続のところを本当に一生懸命練習していてすごいなと思いました。自分がうまくできなくても、みんなに合わせられるようにあきらめずにやる姿勢を見て、自分ももっと一生懸命やりたいと思ったし、高橋さんができるようになるまで、一緒に努力したい

(4) 伝え合うことを実践し始めた久保さん (第19～20時)

本時は、基本打ちのリズムを練習する中で、「音と一緒に心もそろえたい」という願いを実現しようと、グループ練習を通して響きを体で感じ、互いの表情や会話から思いを汲み取りながら練習方法を工夫する場面であった。生徒は、これまで和太鼓とかかわってきて、体で響きを感じながら、みんなの音をそろえていきたいと考えていた。そこで、授業者は、本時の導入の場面で、これまでの経験を基にしながら「響き」を感じるにはどうしたらよいかと問いかけ、生徒の発言を促した。その発問に対し、最初に宮田君が「心と音の響き合いを感じていきたい」と語り、さらに「体で感じたい」という小川さんや清滝君の発言へと繋がっていった。

Aグループの練習は、和太鼓を習った経験のある宮下君の練習計画でほぼ進んできていたが、久保さんは宮下君だけに依存してきた自分たちの姿勢を反省し、前時の感想の中で「グループ内でもっと考えを言い合えるようにしたい」と記述していた。Aグループは、みんなの音を「そろえる」という共通課題を設定した上で、個人やペアでの練習の時間も設定して、個人の課題にも対応した練習ができるようにグループでの練習方法を工夫していた。このことが、久保さんと高橋さんのペアが「二人で和太鼓を響かせるためにはどうしたらよいか」を考え合う場を生んだ。久保さんは、初めは一人で連打にアクセントを付けて叩く練習をしていたが、練習が始まって15分後に、久保さんがバチをゆっくり大きく振り上げ、強調しながら叩く練習を始めた。久保さんとペアを組んでいた高橋さんは、空打ちしながら久保さんの手の動きをじっと見つめ、一方の久保さんは、



写真1 ペアで伝え合う生徒の姿

持っていたバチを振り上げたまま、その手を止めて高橋さんに声をかけていた。高橋さんは、久保さんからアドバイスされた「叩く時に強く握る」動作を実践しようと、前回よりもさらにバチを長めに持ち、太鼓を叩き始めた。久保さんが自分が今までにつかんできたことを、友に伝えたくなくなったのだとらえた。

高橋さんと久保さんは、この日の練習の終了時に、マメができたお互いの手を見合って微笑んでいた。授業者は、久保さんと高橋さんの関係性がさらに深まっているとらえたが、久保さんがどう感じているのかを確かめたくて、グループでの振り返りの後に全体が多目的室に戻る移動途中で久保さんに話しかけてみた。久保さんは頬をゆるめ、うれしそうに「高橋さんがすごく頑張っていて、変わったと思って…」と語り出した。

高橋さんは振り返りの感想を次のように書いている。

「グループ練習で外にいて打った時にアクセントの練習をして、連続のところにもアクセントを入れてやったら、ずれたりとかあんまり変化がなかったりしたんですが、久保さんが『高く振り上げて、はねさせる感じで、おろす時だけ力を入れると大きい音が出るよ』と教えてくれたので、澤さんと一緒に連続のところを練習すると、連続のところにもアクセントがつけられるようになりました！」高橋さんにとって、同じグループで常に自分を見ていてくれる久保さんの存在が大きく、この関係性の中で達成感を味わってきていることが、自信にもつながっていると考えられる。久保さんは、本時の振り返りで高橋さんとのかかわりを次のように記述した。

「今日も、高橋さんはすごく頑張っていました。自分なりに努力して、いろんなことを吸収していくし、アドバイスをするとすごく素直に聴いてくれて、それを一生懸命実践しようとしていました。そんな高橋さんを見習って練習していきたいです。友だちが太鼓を叩いている時、空いている近くの太鼓に手を当てっていると、共鳴していて、すごく振動が伝わってきました。これから、太鼓だけではなく、叩いている人も共鳴するようにそろえて叩けたらいいです。そうできたら、一体感も感じると思います。D×Dです。(下線は筆者加筆)

久保さんにとって、高橋さんは単に教える相手ではなく、自分にとっても影響を与えてくれる、かけがえのない存在になっている。そして、和太鼓の活動を通して、友とのかかわりが深まり、さらに学級の人間関係にも影響をし、総合的な学習を通して学級の一体感が強まっていることを授業者は実感した。

(5) 学級の総合的な学習の意義を語る久保さん

久保さんは、本時の授業を終えて次のように振り返った。

自分なりに「よく聴き、深く考え、進んで発言する」ということができたと思います。よく聴くというのは、友だちの意見を聴くことはもちろん、友だちの叩く太鼓の音を聴き、感じるというのもそうだと思います。友だちの太鼓の音を聴く、というよりも感じることができました。高橋さんがなかなかアクセントをつけられないときには、一緒になって考えたり、アドバイスをしたりできました。

それで、練習していくうちにだんだん上手になっていく高橋さんの姿を見ていると、自分のことのようにうれしかったです。それに、その高橋さんの変った姿に気づいてくれる荻原さんがいて、お互いを認め合っていくような、一体感のある(D×D)総合になってきたような気がします。また2Dの総合が一步前進しました。

久保さんのように、対象にかかわり、自分たちで決めた3つの「カギ」を手がかりに、学級の全員で取り組んでいる総合的な学習の時間を振り返る生徒の姿に出会えたことを、授業者としてとてもうれしく感じた。

3年間クラス替えないという本校の学級編成の方式と、学級単位で探究テーマを追究していく本校の総合的な学習のあり方から、必然的に総合的な学習は学級の中核的な活動となり、道徳や特別活動などの学級担任がかかわる学習活動との連携も深まる傾向にある。その中で、生徒たちは、単発の活動という意識ではなく、学級の仲間との追究により、自分自身が前進し続ける中での本時の一步であるという意識が育っているように思う。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

授業者は、本活動における支援として、和太鼓の響きを友と共に感じていかれるよう、かかわりが生まれるグルーピングや、響きのポイントを整理し、グループの課題が明確になっていくように、それぞれのタイミングで場づくりをし、声かけをしてきた。久保さんは、友と共に和太鼓とかかわることで、「聴く」ことから「叩き」、「感じる」ことへと入り込んでいった。久保さんが、このように自分の追究を深めていけたのは、一緒に活動していた高橋さんも共に和太鼓の活動に寄り込んでいたからにはかならない。そして、高橋さんの真剣に取り組む姿に影響を受け、自分とのかかわりの中でお互いを評価し合う学びの場を自ら生成していた。

本校では、総合的な学習の時間を学級経営の中核的な「時間」に位置づけて実践しているが、今回の実践では、生徒たちが「和太鼓」の演奏を通してつながり合い、響きを重ね合う活動の中で、生徒一人ひとりの探究が深まっていくプロセスの一端を、久保さんの姿を通して明らかにした。紙面の関係で他の生徒にとっての和太鼓との出会いの意味や追究のプロセスを掲載することはできなかったが、一人ひとりの生徒の意識に寄り添い、その姿を丁寧に読み取っていくとき、総合的な学習によって育まれるその生徒にとっての学びが、少しずつ見えてくるのがわかった。目立つ活動の流れだけを追い、全体的な取り組みを総括的に考察するだけでは、総合的な学習における個々の生徒の探究プロセスを明らかにすることは難しい。一人ひとりにとっての学びの質を吟味しながら、息の長い活動の支援のあり方と生徒の探究プロセスを明らかにするための手立てを実践の中から提案していくことが重要であると感じた。

(2) 今後の課題

本研究は、活動そのものが探究であるような総合的な学習の学びにおいて、生徒一人ひとりの探究がどのような過程を経て深まっていくのかを明らかにすることを目的にした。研究方法として、特定の生徒の目線、活動意識に着目して、その「個のストーリー」をつなげていくという手法をとったことになる。こうした方法から明らかになる部分と、そうでない部分があるため、生徒たちの中に全体としてどのような学びが生まれたのかを正確に把握することには限界がある。

今後の課題の1つ目に、こうした研究を行う上での抽出生徒をどのような観点からどのように選択し、その生徒の何を記録していくかという研究方法の問題も吟味される必要がある。今回の研究は、実践研究にとって有効なデータを得やすい生徒を抽出生徒としたものではないが、研究テーマに対する個々の生徒の意識の差は無視できないだけに、それをふまえて客観的に異なるタイプの生徒を抽出し、それぞれの学びに着目していく努力が求められる。

2つ目の課題としてあげるべきことは、総合的な学習の素材研究の水準の問題である。授業者が、探究すべきテーマにかかわる素材研究をどこまで追究できるかによって、総合的な学習で学ばれる内容の幅や奥行きが規定される傾向があることは当然である。本稿で取り上げた実践の部分は、現在も継続進行中の総合的な学習「体で感じる和太鼓の響き」の途中経過に過ぎず、現在では地域の文化行事との連携にも発展している。今回の「和太鼓」という素材は、「音の重なり」や「響き合い」だけでなく、伝統文化や国際社会における地域性という側面からも追究できるし、空気の流れという着眼点から自然科学との接点を学習材に呼び込むこともできる。際限のないつながりが期待される中、学習の主体である生徒たちの学ぶ意欲や追究する必然性などを大事にしなが、どこまで追究の幅を広げ、奥行きに迫っていくのかは、まさに総合的な学習ならではの、教師と生徒の学び合いのエネルギーにかかっているとさえ言えよう。さらに、授業者が、生徒とその素材にどこまで本気になって浸り込めるかという部分も、総合的な学習の学びの質を大きく左右する。本実践を支えた授業者は、自ら和太鼓のプロに学び、自分自身の手にもめを作り、和太鼓のみならず生徒一人ひとりと向き合ってきた。そういう教師の姿も、生徒の学びに影響を与えることは言うまでもない。

3つ目の課題としては、学校全体の教育課程において、総合的な学習の時間の位置づけ方の違いが実践の質にどのような差をもたらすのかといった観点からの分析である。本校のように、総合的な学習の時間を学級経営の中核的な「時間」に据えて、長期間の見通しをもって取り組む学校では、学級の間人関係や学び合う雰囲気とともに、担任教師と生徒との学び合う関係性も重要な要因となるであろうし、総合的な学習での学びの成果が、他の教科・領域での学習活動に何らかの効果をもたらすという側面もあるだろう。年間70時間の枠だけを教科・道徳・特別活動との連携を欠いたまま、独立して取り組むタイプの「総合的な学習の時間」の実践と比べて、本校のようなタイプの総合的な学習で培われるものを、具体的にどのように説明できるのかといった検討も、今後の課題となるだろう。

(2010年6月30日 受付)

資料1 単元の展開

過程	学習活動	生徒の姿()や意識	問 い	教師の支援	*評価	時間			
出 会 う	D組YU MEマップ を作成 する。	マップを作るって いても、夢なん て広がらないよ。 だって、和太鼓イ ヤだもん。	みんなが叩けるよ うになれば、交流 活動ができそう。 どんな夢を実現できるのかな。	松本城演奏がした いけどみんな叩い てくれるかな？	D R E N D	自ら動き出した生徒による活動報告会を開き、自らを見つめ、和太鼓をまだ受け入れられないでいる生徒の生の声に出会える場をしつらえることで、互いの思いを分かち合い、和太鼓を叩いていこうという思いをもてるようにする。	1 2		
	新副担 千野先生に 総合を紹介 する。	手まわりを本気で追 究しました。楽し かったな…。	1年かけて、みん なで和太鼓を決め 出してたんです。	僕は、最初は一人 で和太鼓を始めた んですよ。			3 4		
	有志で鳴 桜さん体験 ツアーに出 かける。	窪田さんが動き出 そうとしている。す ごい。だけど、私は そこまではまだ動 きたくない。	よし。私は体験ツ アーに参加しよう！ 早く小嶋さんとも一 緒に叩きたいな。	えっ？一緒に来てく れるの？嬉しいな！ みんなで叩こう！			5 6		
	和太鼓を叩き始めよう！								
	鳴桜さん で教わっ た練習を 行う。	窪田さんがあんなに 真剣に叩いている…。 叩いていくと楽し さも知れない。よし！ 私もやってみよう。	体験ツアーに参加して 和太鼓の見方が変わ った。小嶋さんも手ま りの時のようになっ てくれるといいな。	体験ツアーで感じ た鼓動を感じてほ しいと思ったけど、 どうだったんだろ う。伝わったかな。			M	とにかくドンドン叩きたいという生徒の声を待ち受け、一緒に太鼓を叩く中で、その生徒の本気の姿を思い描き、その姿に出会えた時に叩き続けてきた姿を価値づけることで、本気になってきた自分を受け入れていられるようにする。	7 8
	練習2・ 3を全体 で行う。	やるからには、手 にマメをつくりたい。 叩くぞ。(何度も手 を見ながら)まだ本 気じゃないな。	私自身、叩いてうま くなりたいたいな。 ゆっくり腕を上げて 強く叩きたいな。	みんなに伝わるよ うに、僕がよい音 を出さなくちゃ！ もっとたくさん教 えなきゃ！			A J I		9 10
打 ち	今までの 練習曲を 通して行 う。	やった！ついに私 の手にマメができた。 こんなに本気にな れるなんて…。嬉し いな。	もっとゆっくりな テンポで叩きたいな。 みんな本気だけど、 音がそろわないな。	締めめのテンポは これで大丈夫かな。 おかしいな。音が そろわないよ。	D E	*自分たちが思い描いた夢をもとに、和太鼓とのかかわりについて、自ら課題を設定できる。①	11 12		
	みんなの音をそろえたい。								
	練習1を グループ でそろえ る。	合唱と同じように 出だしをそろえれば そろうと思ったけど、 失敗。そんなに簡単 じゃないんだ。	グループに分かれた のでそろえやすいけ ど、まだだめだ。こ んなにそろってない んだ。	グループの発表の 時に速くなってし まった。速すぎて 困っている人がい るのかな？	D	友の動きや思いに目を向け始めた生徒の姿を待ち受け、小グループを構成し、互いに自らの課題を伝え合いながらグループ活動の場を考えていられるようにすることで、他者へ関心を向けている自他のかかわりを考えていられるようにする。	13 14		
そろえる 視点を考 えて練習 する。	連打のところはどう しても遅れてしま う。自信がないな。	テンポがそろって いないから、もっと ゆっくりでいいんじ ゃないかな。	それは分かるん だけど、つい速くな っちゃう。音だけ そろえようとする とダメなんだよな。	X		15 16			
視点を 見直し グループ や全体 でそろ える。	連打のところは小 さく叩いて目立た ないようにしてお こう。 ちゃんと見てくれ ているんだ。私も頑 張らなくちゃ。	失敗してもいい から、自信をもっ て思い切って叩 こうよ。 私だって、まだ だめ。もっと叩 きたい。	音を聴くだけじゃ そろわない。みん なで速さをそろ えて、響きを体 で感じたい。	D	*自他の思いを分かち合いながら、音をそろえるための方法を工夫することができる。①	17 18			
体で響きを感じながら、みんなの音をそろえたい。									
互いの 思いを 伝え合 いなが らそろ える。	和太鼓を通して、 私自身本気にな れ、またみんなと 一緒に叩いたこと が本当に嬉しい です。	小嶋さんが手ま りの時のように 本気になってく れて嬉しい。和 太鼓で私たちが また一つにな れた。	自分の気持ちだ けじゃなくて、心 をそろえていく こと。やっぱり 「音と心の響き 合い」だな。	D X D	グループの輪に入り一緒に叩きながら、個々の課題が何か問い返し、互いに声をかけ合う姿を認めていくことで、心をそろえていられるようにする。 *友の思いをくみ取り、尊重しながら練習を進め、自分も友も思いやり和太鼓を叩くことができる。②	19 20 (本時)			
私が感じた和太鼓の響きを伝え合いたい。									
これからの 総合に むけて、 今までの 活動を振 り返る。	以前、和太鼓のやり がいは「音と心の響 き合い」って言う たけど、なぜ心に 響くのか分かって きた。私は、これ まで太鼓の大き な音ばかりに気 がっていたけど、 みんなでたたいて 響きを感じること ができた。自分 が本気になり、 音を振動として 全体で聴くと、 友だちの音にも 変化を感じる。 自分の音が響 きとなり、2D の中に重なって いく感じ、一体 感が味わえた。			D R E N D	本単元での喜びや大変だったことを生徒と語り合うことで、次単元への願いをもてるようにする。 *和太鼓と向き合いつづけた価値を自覚することができる。③	21 22			